

2 夜久野末窯跡群の調査（1）

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

京都府福知山市夜久野町の高内、日置、末にまたがって所在する夜久野末窯跡群は、7世紀から9世紀にいたる須恵器生産遺跡であり、「末」の地名も残ることもあって、早くから注目されてきた。しばしば分布調査もおこなわれてきた結果、2km四方の範囲に50基以上の窯が存在することが知られるようになり、須恵器の窯跡群としては規模が大きいものの一つである。近年では、在野の研究者、東昭吾氏による踏査の結果、新たに数多くの窯が発見され、後述するように100基を越す窯跡の存在が推測できるようになり、京都府内では亀岡市篠窯跡群と並ぶ最大級の古代窯跡群であることが明らかになりつつある。ただし、発掘調査などの詳細な調査がほとんどなく、また、工房など集落遺跡も十分には解明されていない。そして、窯の操業を終えて以後、開発がほとんどなかったため、結果として、古代の窯跡群がそのまま手つかずで残されている。したがって、窯場の景観を含め、古代の須恵器生産地の様相を把握できる貴重な遺跡であると評価できる。今回、京都府立大学地域貢献型地域研究（ACTR）「夜久野末窯跡群を中心とした地域の文化遺産の調査と活用」として、景観も含め窯跡群の調査をおこない、その価値を広く知ってもらう活動を、福知山市とともにおこなうことにした。

古代の須恵器窯は、斜面にトンネル状の窯体を設け、焚口の前面に作業空間である前庭部があり、その下方に灰や失敗品を廃棄する灰原が形成される。地表面の観察から、この窯体や前庭部、灰原の痕跡を見いだすことが可能であり、今回の調査では、こうした観察をおこなって、その記録の作成から、窯の分布の基礎資料を作成した。また、窯のある地形や地質上の特徴についても検討をおこない、窯の分布の範囲と地質との相関について明らかにすることとした。さらに、実際に歩くことによって、窯をつなぐ道についても検討を及ぼした。調査では、長く窯跡の分布調査をおこなっている東昭吾氏、および京都府立大学非常勤講師で地質が専門の小滝篤夫氏が同道し、現地での指導を受けた。なお、調査結果を示したベースマップの作成にあたっては、京都府立大学大学院生命環境科学研究科の福井亘准教授の手をわずらわせた。

調査にあたっては、地元の高内地区自治会長・的場渡さん、日置地区自治会長・衣川啓二郎さん、末地区自治会長・衣川忠昭さんにご協力いただき、福知山市文化・スポーツ振興課の松本学博、鷺田紀子の両氏には調整を含めお世話をいただいた。記して謝意を表したい。参加者は以下の通りである。（菱田哲郎）

調査参加者 菱田哲郎・諫早直人・大平理紗・稲本悠一・陰地祐輝・田口裕貴・岡田大雄・大須賀広夢・鈴木康大・池田野々花・小林楓・溝口泰久・湯浅美玖

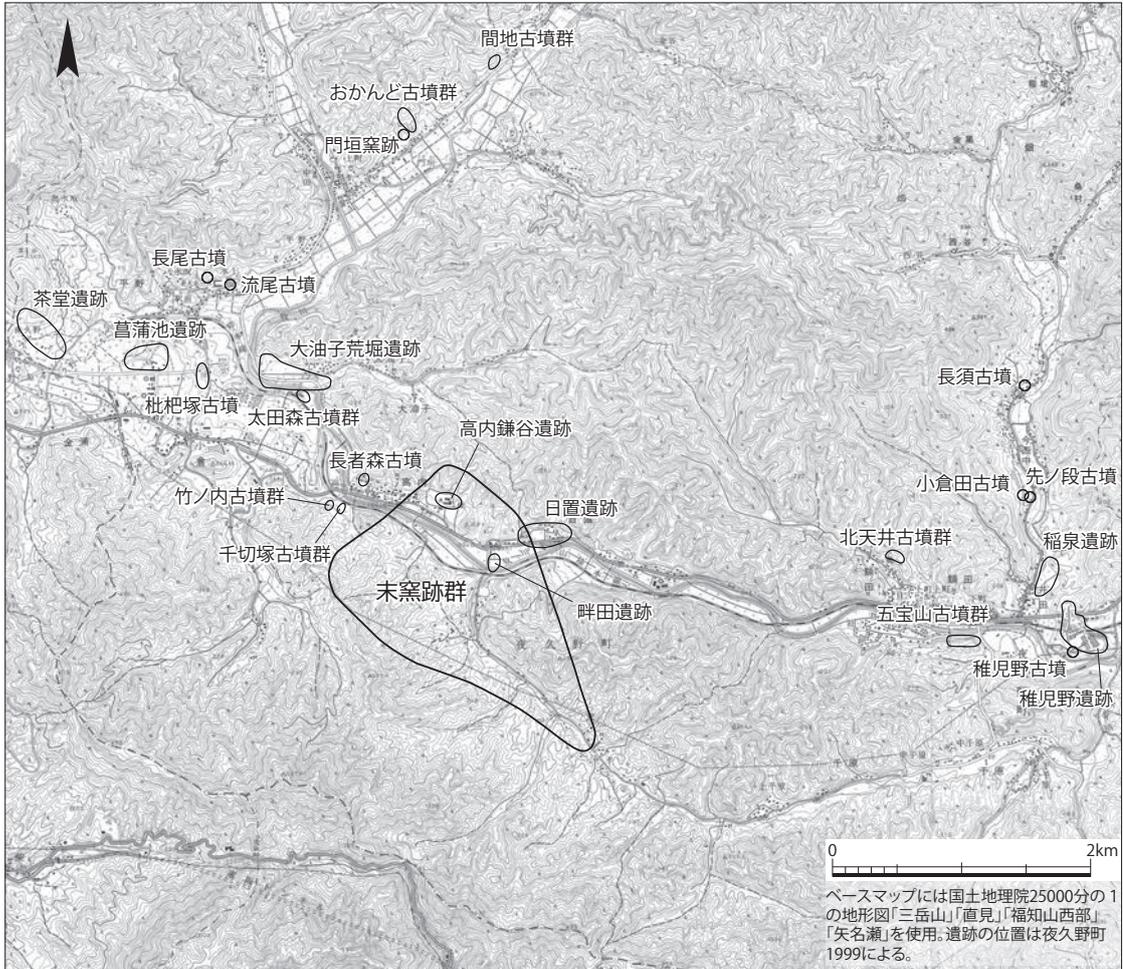


図1 調査地位置図 (S=1/60,000)

2. 地理的・歴史的環境

夜久野は丹波国天田郡に属し、地理的には福知山盆地と和田山盆地をつなぐ夜久野ヶ原から東に広がっている。夜久野ヶ原一帯は田倉山の36万年前の噴火によって玄武岩が多く分布するが、遺跡周辺は牧川右岸にて斑糲岩、左岸にて砂岩・泥岩がみられる¹⁾(石田2005)。

古墳時代前中期の集落遺跡としては茶堂遺跡があり、このほか五宝山古墳群、北天井古墳群がこの時期に遡る可能性がある。古墳時代後期の代表的な古墳としては全長約12mの横穴式石室をもつ長者森古墳、金銅装双龍文環頭大刀の柄頭が出土した小倉田古墳、竪穴系横口式石室を持つ流尾古墳が挙げられる。7世紀には全長5.3mの横穴式石室をもつ太田森2号墳、残存長7.2mの横穴式石室をもつ長尾古墳などがあり、古墳が連綿と築造される様子が見えらる。集落遺跡には稚児野遺跡のほか、未窯跡群の供給地の一つである大油子荒堀遺跡がある。

天田郡内の窯業生産としては未窯跡群に先行して6世紀代に稼働した福知山市賀茂野窯跡、後続の釜谷遺跡が存在するほか、未窯跡群から派生し8世紀に稼働した門垣窯跡が存在する。天田郡周辺では未窯跡群と同時期に稼働した須恵器生産地として氷上郡鴨庄古窯跡群、多紀郡高倉石住窯跡群、船井郡園部窯跡群がある。

3. 既往の調査

末窯跡群の存在は古くから知られていたが、発掘調査事例は少なく、主として分布調査により遺跡の性格が把握されてきた。

最も古い記述は『郷土夜久野歴史篇』のもので、20 数カ所の窯の存在が確認されている（京都府天田郡夜久野町教育研究会 1966）。1976 年『丹波夜久野の文化財』において確認された窯は 40 カ所に及んでおり、採集された須恵器杯、蓋、甕のほか瓦の実測図や写真が掲載されている（京都府立丹後郷土資料館 1976）。

1994 年には夜久野中学校の建設に伴い高内鎌谷遺跡で初の発掘調査がおこなわれた。灰原が 2 カ所検出され、そこから 7 世紀末から 8 世紀初頭、また 9 世紀末から 10 世紀前半の 2 時期にわたる遺物が出土した（夜久野町教委 1994）。1997 年には排水池工事に伴い日置地区末 5 号窯の発掘調査がおこなわれ、初めて焚口部分が調査された²⁾。生産された須恵器は 7 世紀前半のもので、末窯跡群では最も古い一群である（夜久野町教委 1997、菱田ほか 2013）。その後も採集資料から窯跡の特定が進められ、『夜久野町史』では 53 基の窯跡が確認されている（菱田ほか 2013）。2018 年には、東省吾氏が先行研究で確認されていた窯跡の再整理及び新規窯跡の分布調査をおこない、総数 100 基を超える窯跡群であることを明らかにした（東 2018）。（小林楓）

4. 調査内容

自然地形などの立地情報や窯跡の現状を把握するために、東氏の案内のもと 3 日間の踏査をおこなった。踏査した窯跡は以下の通りである。

- 1 日目 ナゲ 1・4・7～9 号窯、畑ヶ谷 1～5・7～14 号窯
日ノ本南 1～5・7・8 号窯
- 2 日目 日ノ本北 1～5 号窯、末親谷 1～9・14 号窯、広畑 7・8 号窯
- 3 日目 ①関垣 1～7 号窯、日置 1～3 号窯、鎌谷 2・4 号窯、広畑 6 号窯
末親谷 16・18～21 号窯、高内親谷 9・11～15・24～31 号窯
②ナゲ・畑ヶ谷・日ノ本南支群の再確認



図 2 踏査風景

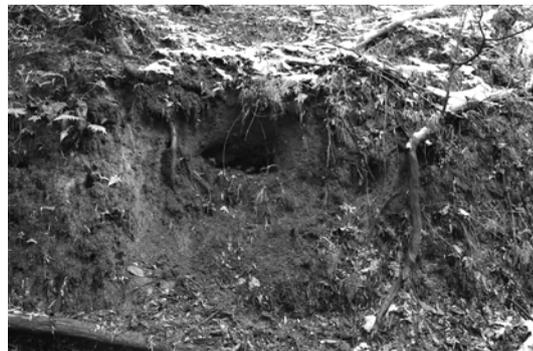


図 3 関垣 2 号窯窯体断面の露頭

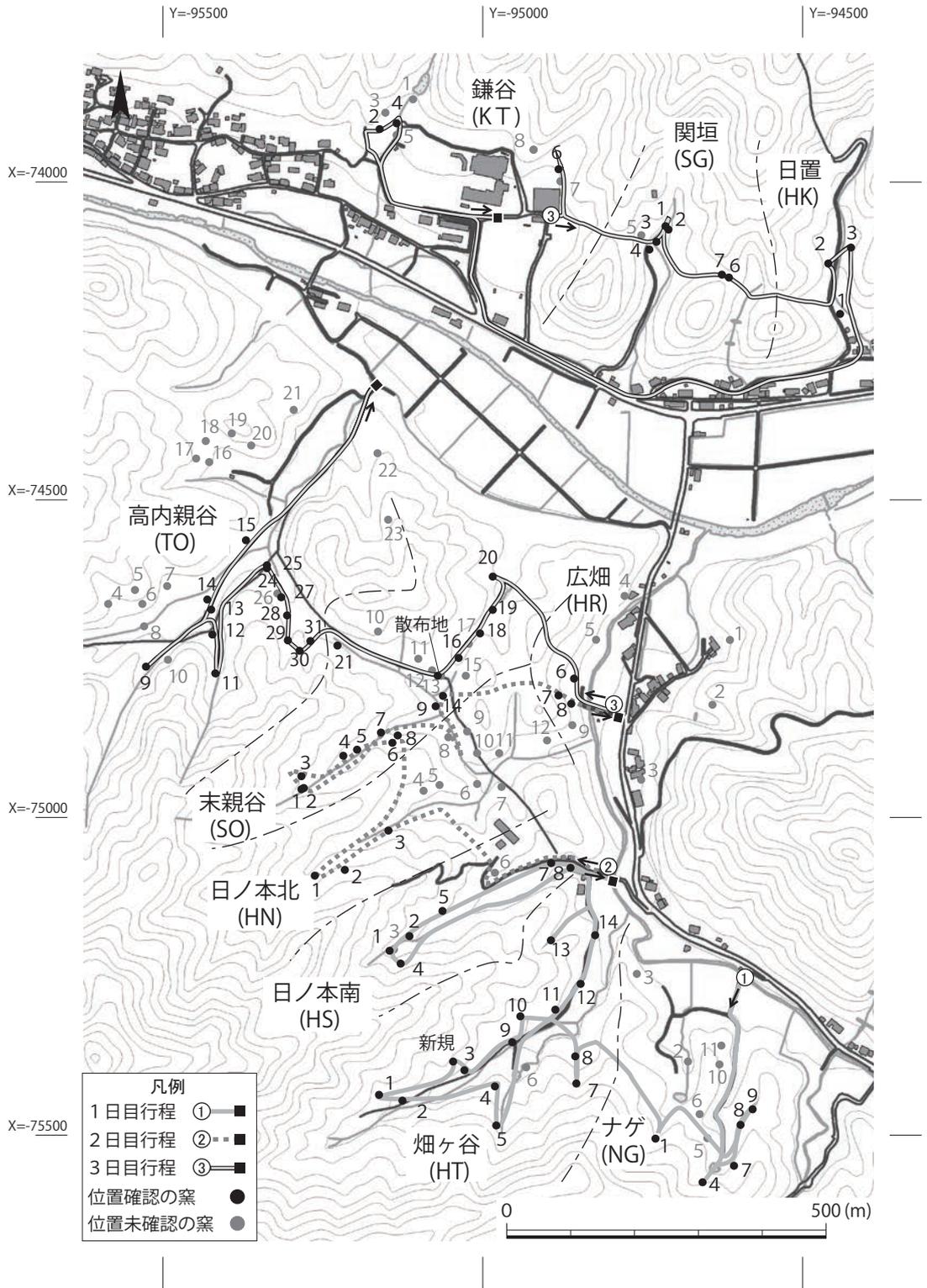


図4 窯跡分布と踏査ルート (S=1/10,000)

1日目は積雪・降雪により地表面の情報がやや不明瞭ながらも、ナゲ・畑ヶ谷・日ノ本南支群を踏査した。2日目は日ノ本北・末親谷・広畑支群を踏査したが、前日より強い降雪が続く遺跡の観察は困難であったため、窯跡の位置確認に努めることとなった。3日目は天候が

回復し地表面を明確に観察することが可能になったため、引き続き支群を移して踏査をおこなう班（①）と1日目に踏査したナゲ・畑ヶ谷・日ノ本南支群を再調査する班（②）に分かれ行動した。現地にて確認した窯跡の現況については表1の通りである。

窯跡の残存状況の確認と遺物の採集が主な活動内容となった。ナゲ4・7号窯や関垣1・2号窯は斜面に露頭した窯体断面が観察できた。窯体断面は確認できないが、窯体天井部が崩落したことで地表面に形成される馬蹄形状の落ち込みや、斜面に地表の落ち込みとともに窯前面の作業スペースである前庭部とよばれる平坦面らしき地形変化が確認されることで窯の存在が推測できる。また、畑ヶ谷13号窯では還元焼成を受けて硬化した窯壁の一部が地表に残存していた。窯で焼成された須恵器の散布も多数の地点で確認され、なかには地表面に埋もれた須恵器の様子から不良品などを投棄した灰原の露頭として観察可能な地点もある。総じて残存状況が良好な窯跡が多数あり遺跡としての貴重な価値を認識することができた。

5. 採集遺物について

今回の踏査でも灰原と考えられる堆積の露頭や須恵器の散布が確認できた。器種を判別しうる破片を中心に採集し、そのなかでも特徴的なものを実測した(図5)。なお、器種名については基本的に奈良文化財研究所による器種分類に従う(神野・森川2010)。

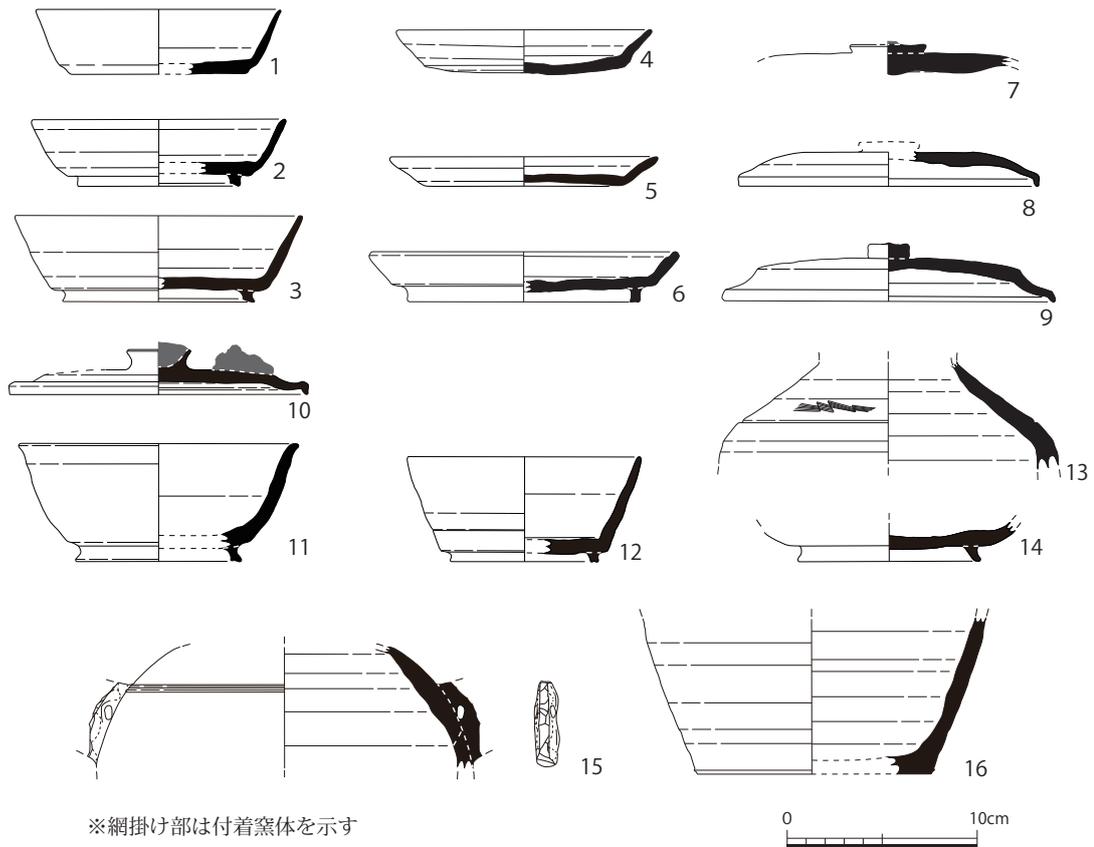
1は杯Aである。底部を平滑に調整している。2～4は杯Bである。2は体部と底部の境

表1 各窯跡の現況

支群 窯番号	確認内容	支群 窯番号	確認内容	
鎌谷	2 須恵器散布	ナゲ	1 灰原露頭、前庭部らしき平坦面	
	4 須恵器・瓦散布		4 窯体断面露頭、天井部残存	
	6 前庭部らしき平坦面、須恵器多数散布		7 窯体断面露頭(天井部か)、窯内に須恵器残存	
末親谷	1 前庭部らしき平坦面	畑ヶ谷	8 灰原露頭、前庭部らしき平坦面	
	2 平坦面		9 窯体残存の可能性、前庭部らしき平坦面、上部に平坦面(工房か)	
	3 落ち込み(窯内か)、前庭部らしき平坦面		1 須恵器散布	
	4 前庭部らしき平坦面	日ノ本南	2 須恵器散布	
	5 平坦面あり		3 窯内の馬蹄形の崩落、前庭部平坦面残存、須恵器多数散布	
	6 2基並列の可能性、窯壁片採集		4 灰原露頭、須恵器多数散布	
	7 上方に平坦面、須恵器多数散布		5 須恵器多数散布	
	8 窯体断面露頭		7 落ち込み(窯体か)、前庭部らしき平坦面、須恵器多数散布	
	9 須恵器散布		8 須恵器散布	
	14 前庭部らしき平坦面		9 窯体断面露出、天井部残存	
	16 須恵器散布		10 灰原露出(二次堆積か)	
18 須恵器散布	11 須恵器散布			
19 須恵器散布	12 落ち込み(窯体か)、灰原			
20 平坦面あり	13 窯壁確認、遺物未確認			
21 須恵器散布	14 須恵器散布			
関垣	1 天井崩落、右側壁残存、還元層・被熱部確認、窯体の落ち込み	日ノ本北	新規 須恵器散布	
	2 窯体床面・側壁・天井部残存、窯体の落ち込み、上に平坦面あり		1 前庭部らしき平坦面、落ち込み(窯体か)	
	3 須恵器散布		2 落ち込み(窯体か)	
	4 位置確認(末5号窯として既往の調査で発掘)		3 遺物散布	
	5 位置のみ確認		4 前庭部らしき平坦面、落ち込み(窯体か)、窯壁片採集	
	6 前庭部らしき平坦面とその下に小さな平坦面		5 灰原露頭、前庭部らしき平坦面、既往の調査で窯体断面確認	
	7 窯体の落ち込みあり		7 灰原薄く露頭	
高内親谷	9 灰原露頭、須恵器多数散布	日ノ本	1 二次堆積の灰層	
	11 窯体かなり上方か		2 灰原層露頭、上方に平坦部(工房か)	
	12 前庭部らしき平坦面、窯壁採集		3 二次堆積の灰原か	
	13 灰原露頭、前庭部らしき平坦面、須恵器多数散布		4 遠方から位置確認	
	14 須恵器散布		5 遠方から位置確認	
	15 須恵器散布		8 平坦面あり、窯壁片採集	
	24 位置確認のみ		9 須恵器散布	
	25 位置確認のみ		広畑	6 須恵器散布
	26 位置確認のみ			7 須恵器散布
	27 位置確認のみ	8 落ち込み(窯体か)		
	28 窯体の落ち込み、前庭部らしき平坦部	日置	1 全壊か	
29 前庭部らしき平坦部、その他付近に3か所ほど平坦面	2 窯体はかなり上方か			
30 前庭部らしき平坦面、灰原良好に残存	3 かなり破壊されているか			
31 落ち込み(窯体か)、灰原良好に残存か				

が緩やかで高台の貼り付けがやや粗雑で、3は底部と体部の稜線がはっきりとし底部も回転ナデで調整され、高台の貼り付けも丁寧である。4はやや丸底で回転ヘラ切り未調整である。底部と体部の境あたりに重ね焼きの痕跡が残る。5は体部がやや屈曲する。6はやや内斜する高台を丁寧に貼り付ける。内面の口縁部付近に凹線をいれるのが特徴的である。7～10は杯蓋である。7・8は同じ窯の製品で扁平なつまみをもち体部が笠形である。9はボタン状のつまみが付され体部が屈曲する。天井部外面は回転ヘラ切りのち回転ナデで調整されている。10は環状のつまみが付され、11のような杯Lに分類される佐波理稜椀に類する形態の器種に組み合う。12は径に対して器高が高い椀Bで体部に沈線が施される。13は壺の肩部の破片である。自然釉がかかり器肌の観察は難しいが、沈線の上方に波状文が確認できる。14は壺の底部片で、高台の貼り付けが丁寧である。15は、肩部付近に耳が付く双耳壺である。破片の上端から屈曲して器壁も薄くなる。耳の上端に沈線が巡る。16は器壁が直線的に伸び、壺類もしくは鉢であると考えられる。体部と底部が明瞭な境をなし、底部は平滑に調整される。

これらの時期については上記の特徴や同じ窯で過去に採集されている須恵器からおおよその年代を推測することができる。4・7・8・10・12・14・16は大きくは8世紀前半に、1・3・5・6・9・11・14・15は8世紀後半におさまると考えられ、2は9世紀初頭ごろまで下る可能性がある。（溝口泰久）



1,9,15：畑ヶ谷3号窯 2：ナゲ8号窯 3,6：畑ヶ谷11号窯 4：関垣3号窯 5：高内親谷9号窯 7,8：鎌谷6号窯
10：末親谷7号窯 11：畑ヶ谷4号窯 12：日ノ本南1号窯 13：鎌谷4号窯 14：広畑7号窯 16：末親谷4号窯

図5 主な採集遺物 (S=1/4)

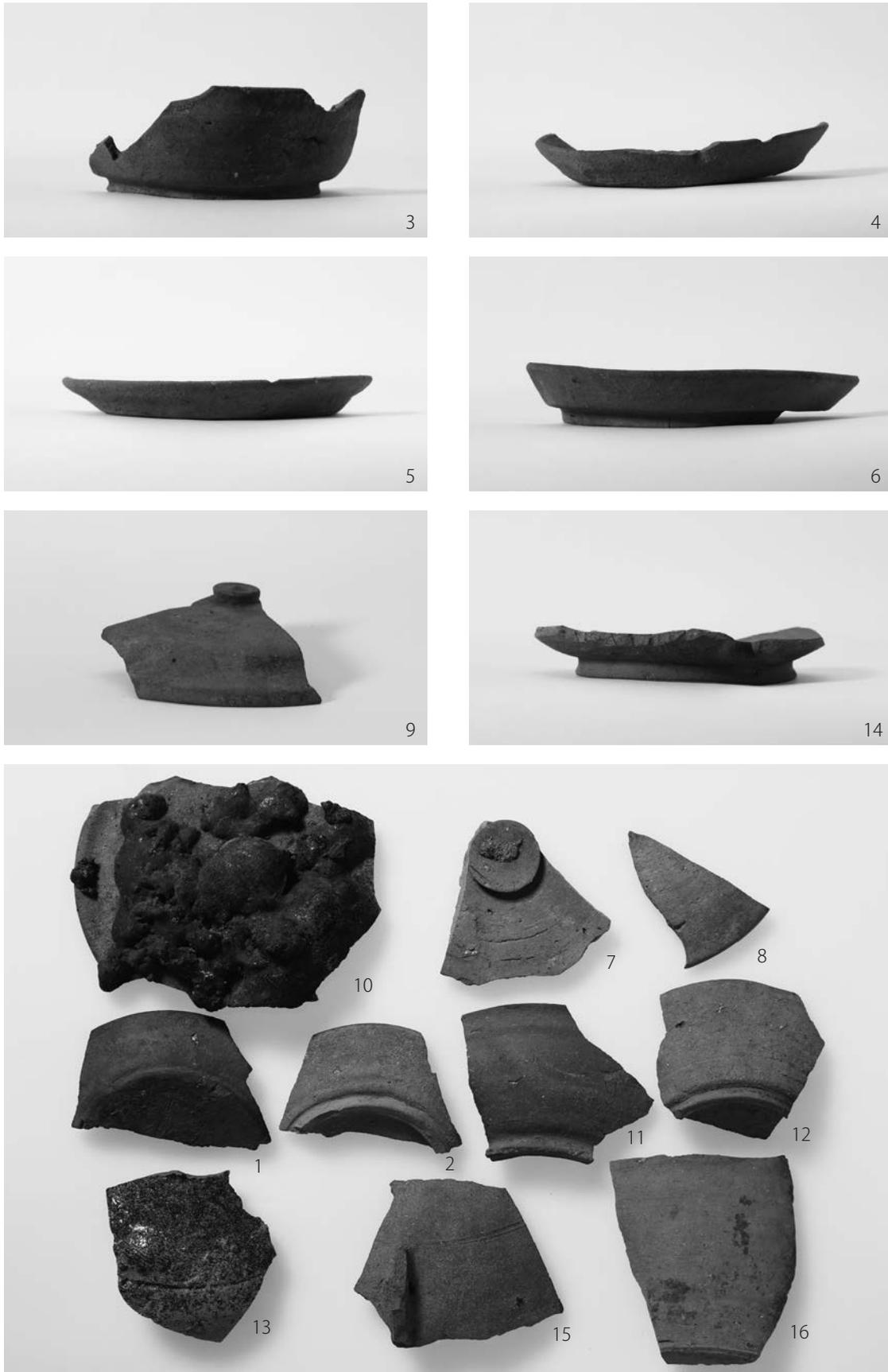


图6 表採遺物写真

6. おわりに

夜久野町末窯跡群を主たるフィールドとする本 ACTR も早くも 2 年目を迎えた。今年度の 2 月に予定されていた窯跡群の踏査も、新型コロナウイルス感染症再拡大に伴う二度目の緊急事態宣言を受けて 3 月に延期となるなど、お世辞にも予定通りに進んでいるとはいえない状況である。東昭吾氏とともに氏の足跡を辿りなおすような調査ではあるが、それでも現地を地元の文化財行政職員を含む複数の目で確認し、これまで大縮尺の地図上に落とされていた窯跡のドットに正確な位置情報（緯度、経度、高度）を与えることによって、今後の末窯跡群の調査・研究、さらには保全や活用に向けての基礎的情報を積み重ねることができたと自負している。

この調査を通して痛感されるのは、里山の荒廃であった。放置された倒木が道を塞いでいるのは茶飯事で、地形観察にさえ苦勞することもしばしばであった。貴重な遺跡の保全はもとより、里山の保全もまた重要な課題であると改めて認識した。活用に至る道程においては、このような問題を解決していく取り組みが必要になるだろう。

本 ACTR ではこの作業と並行して、長者森古墳をはじめ夜久野町内に散在する古墳やその出土資料についても再検討をおこなっている。太田森古墳など早くに調査された古墳もあり、再検討から須恵器生産の開始前夜のこの地域の歴史が明らかになることが期待できる。夜久野町というと、夜久野玄武岩柱状節理（府指定天然記念物）など京都府科唯一の火山である宝山（田倉山）を中心とする自然遺産が注目されがちではあるが、地域に眠る文化遺産もまたそのような自然環境と密接に関わっていることが、明らかとなりつつある。窯跡群の消費地の解明など、解決すべき課題も多く残されているが、総体として地域の文化遺産を自然環境とともに把握する取り組みを続けていきたい。（諫早直人・菱田）

註

- 1) 日本シームレス地質図 <https://gbank.gsj.jp/seamless/>（最終閲覧日：2021/01/18）
- 2) 東 2018 において「関垣 4 号窯」と命名されている。

参考文献

- 東昭吾 2018 『京都府福知山市夜久野町所在 末古窯跡群詳細調査報告書（1）—末古窯跡群詳細分布調査報告—』
- 石田志朗 2005 「夜久野町の自然環境」夜久野町史編集委員会編『夜久野町史』第 1 巻 夜久野町
- 京都府天田郡夜久野町教育研究会 1966 「土器と陶窯址」『郷土夜久野歴史篇 付地誌篇』
- 京都府立丹後郷土資料館 1976 『丹波夜久野の文化財』
- 神野恵・森川実 2010 「平城京の研究法 土器類」『図説 平城京事典』 楓風舎
- 夜久野町教育委員会 1994 『高内鎌谷遺跡発掘調査概報』（夜久野町文化財調査報告第 3 集）
- 夜久野町教育委員会 1997 『末 5 号窯発掘調査概報』（夜久野町文化財調査報告第 6 集）
- 夜久野町教育委員会 1999 『京都府天田郡 夜久野町遺跡地図（補訂版）』（夜久野町文化財調査報告第 9 集）
- 菱田哲郎・崎山正人 2013 「考古資料から見た夜久野の古代」夜久野町史編集委員会編『夜久野町史』第 4 巻 夜久野町